



千葉大学医学部同窓会報 第86号 題字 鈴木 五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

あのはな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥亥 1-8-1

千葉大学医学部内

あのはな同窓会

電話千葉 (0472) 22-7171 内線2038

同窓会長を再度引継ぐに当って

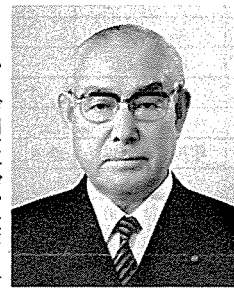
千葉大学医学部のあのはな同窓会長

小林 金市

月日の経つのは早いもので、大塚会長の後を受けて、会長就任以来、已に第三期目を迎えるに至っている。

この間、大学の常任理事を初めとして各役員の並々ならぬ御尽力

は、誠に厳しいものがある。医師過剰の問題、医療費改訂の不履行、医療法一部改正による官僚制の強化、家庭医制度新設に散見する人頭割受負い制等の診療報酬支払制度の変革、老人保健法における自己負担の増強による受診の抑制、中間施設による医療費の削減、基準看護改正による保険点数の引締め、事業税の新設、地方事務官廃止による審査・監査の強化、薬価基準引下げ及び技術料の無視、診



により、わが同窓会が、次第に会員相互の連繫を強め、一応その体

止による審査・監査の強化、薬価基準引下げ及び技術料の無視、診

附属病院長に就任して

内科学第三講座教授

稲垣 義明

二十一世紀の医学と医療がどのようなものかを予測することは極めてむずかしい。たゞし、近年の生命科学における進歩発展はまことに目覚ましく、今後更に飛躍することに間違いないだろう。そうすると、生命現象の追求と医師の日常診療との間に、ある種のへだたり、すなわち医療本来の姿である人間性が失われていく傾向が生じやすくなるのではないかと危惧が生じる。それをどう解決していくかが今後の医学・医療の大きな課題の一つでもあろう。



療報酬査定額の患者への通知及びその払い戻しの強制等々、列挙すれば際限の無い程、種々の難問題が山積している。これ等は何れも医療福祉を放擲して、医療を専ら財政に従属せしめんとするものであり、政府行政当局の無知無見に基づき、医療費削減のみを意図するものに外ならない。

かくしてこの低医療費政策は、次第にその度合を強め、医療経営は益々困窮に陥り、昭和五十一年より本年五月迄に、病医院の倒産が三三三件を数えるに至っている。銀行管理下に置かれていたものも、零々同数ある。しかも、これが五五年以降に急増しているのである。この重大な事態は、深く憂慮せざるを得ない。

医師過剰の問題を一つとて見ても、誠に重大な課題である。戦

後わが国は、人口に比して医師が不足しているとして、極端な医師急増を図り、遂に、毎年八千余名の医師を輩出せしめるに至った。このまま進めば、昭和八〇年には人口十萬対医師二一一名を数える世界一の医師過剰国となるのである。イタリア、オランダ等に見られる如く、医師の失業時代を招来することは必至である。現在の低医療費政策のもとでは、開業も困難であり、それかと云って、就職口も十分に確保出来ない状態である。

そこで、我々同窓会員は、血は水よりも濃い例の如く、一同結束、団結して、お互に力を併せ、この事態をかばい合せて、生存競争に勝ち抜いて行かなければならないのである。同窓会の同窓会たる所以は、これからである。

会員諸兄の御健闘を、深く希念力を注いでいこうということなどである。

千葉大学の病院長は、伝統的に全国国立大学病院長会議常置委員会(国立大学病院四十八のうちの十二校)の委員長をつとめることになっている。文部省と対応しつつ、当面の諸問題としての保険診療問題、地域医療問題、医員制度問題等に、常にその中心的役割をはたす義務があり、これらはまた対外的な仕事として大変なことである。

ともあれ、身体をはって頑張っていこうと思っているので、皆様方の絶大な御支援、御指導をお願いしたい。

- 〔昭和60年度〕昭和62年度
- | | | | |
|------|------------|------------|--------------|
| 名誉会長 | 谷川 久治(昭2) | 名譽会長 | 鈴木 五郎(昭11) |
| 会長 | 小林 金市(昭8) | 副会長 | 井出源四郎(昭19) |
| 副会長 | 嶋田 宗之(昭9) | 国井 光智(昭21) | |
| 常任理事 | 永井 義三(昭10) | 中村民比古(昭13) | 小泉 隆(昭16-12) |
| | 内田 成和(昭17) | 清水 衛(昭19) | 渡辺 誠之(昭21) |
| | 伊東 宏一(昭23) | 石川 清文(昭23) | 萩原彌四郎(昭23) |
| | 越川 衛(昭23) | 稲垣 義明(昭26) | 村山 智(昭26) |
| | 鍋谷 欣市(昭27) | 奥井 勝二(昭28) | 滝沢 明祐(昭31) |
| | 藤森 宗徳(昭37) | 徳永 叔(昭42) | 渡辺 武(昭27) |
| 会計監事 | 小野清四郎(昭31) | | |

会 計 報 告

昭和59年度 決 算 報 告

昭和60年度 予 算 案

A. 収 入 の 部

科 目	予 算 額	年度末収入計	差 引 高 (△減)
財 産 収 入	400,000円	540,792円	140,792円
会 費 収 入	5,000,000	6,397,500	1,397,500
事 業 収 入	0	145,000	145,000
寄 附 金	100	0	△100
繰 入 金	0	0	0
繰 越 金	2,003,517	2,003,517	0
収 入 計	7,403,617	9,086,809	1,683,192

B. 支 出 の 部

科 目	予 算 額	年度末支出計	差 引 高 (△減)
1. 事 業 費			
会 報 発 行 費	650,000	1,600	△648,400
名 簿 発 行 費	0	0	0
新 会 員 歓 迎 費	300,000	300,000	0
顕 彰 奨 学 費	200,000	0	△200,000
慶 弔 費	80,000	78,360	△1,640
支 部 連 絡 費	300,000	186,080	△113,920
小 計	1,530,000	566,040	△963,960

2. 事 務 費

備 品 費	30,000	0	△30,000
消 耗 品 費	150,000	86,590	△63,410
通 信 印 刷 費	1,800,000	1,039,205	△760,795
振 替 手 数 料	110,000	114,570	4,570
会 議 費	70,000	69,110	△890
諸 手 当 費	1,200,000	1,116,822	△83,178
謝 金 費	130,000	114,920	△15,080
小 計	3,490,000	2,541,217	△948,783

3. 予 備 費

基 金 繰 入 額	2,000,000	2,000,000	0
予 備 費	383,617	74,515	△309,102
小 計	2,383,617	2,074,515	△309,102
支 出 計	7,403,617	5,181,772	△2,221,845
繰 越 額		3,905,037	
基 金	18,000,000+2,000,000=20,000,000		

A. 収 入 の 部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)
財 産 収 入	500,000円	100,000円
会 費 収 入	6,000,000	1,000,000
事 業 収 入	7,500,000	7,500,000
寄 附 金	100	0
繰 入 金	0	0
繰 越 金	3,905,037	1,901,520
収 入 計	17,905,137	10,501,520

B. 支 出 の 部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)
1. 事 業 費		
会 報 発 行 費	650,000	0
名 簿 発 行 費	7,150,000	7,150,000
新 会 員 歓 迎 費	300,000	0
顕 彰 奨 学 費	200,000	0
慶 弔 費	80,000	0
支 部 連 絡 費	300,000	0
小 計	8,680,000	7,150,000

2. 事 務 費

備 品 費	30,000	0
消 耗 品 費	200,000	50,000
通 信 印 刷 費	2,400,000	600,000
振 替 手 数 料	210,000	100,000
会 議 費	100,000	30,000
諸 手 当 費	1,200,000	0
謝 金 費	130,000	0
小 計	4,270,000	780,000

3. 予 備 費

基 金 繰 入 額	4,000,000	2,000,000
予 備 費	955,137	571,520
小 計	4,955,137	2,571,520
支 出 計	17,905,137	10,501,520
基 金	20,000,000	

昭和60年度

あのはな同窓会総会開催さる

昭和60年度あのはな同窓会総会は、六月十五日(土)、千葉市の京成ホテルに於て、千葉あのはな会担当の下に開催された。

総会は、小林会長の挨拶により始まった。吉田医学部長の医学部近況報告、村山常任理事より会務報告があった後、昨年の物故者58名の冥福を祈り黙祷を捧げた。次いで議事に移り、小林会長の議長として選び、石川常任理事より昭和59年度決算および昭和60年度予算案(第2面に掲載)の提出と説明があり、いずれも原案通り承認された。萩原常任理事より本会役員の改選案(第一面)が出され全会一致で承認された。また、昭和60年3月に本学を定年退官された米澤利英、佐藤 博両名誉教授、および佐藤保雄前会計監事の三氏を名誉会員に推薦することに決定した。最後に、所用で遅参された井出学長より千葉大学の近況報告があった。国井副会長の閉会の辞によって総会は無事終了した。

総会に引き続いて、「文化人類学からみた日本人——からだ心と習俗と——」と題して、放送大学教授、祖父江孝男氏による総会講演があった。

日本では、縄文期より古い人骨の出土例が極めて少なく、その当時の日本人の文化人類学的考察はできないが、縄文以後について言えば、縄文土器の紋様の伝播速度

が非常に早いこと、弥生期の穀物農耕の始まりから「国家」の出現まで、わずか六百年と他に類をみない程短期間であったことから、日本人の外来文化受入れに対する寛大さは縄文、弥生人ですでに認められる。

また、攻撃的性格で知られているカナダインディアン等の民族が目を見張るまでに大きく表現していたのと対比的に、細い目のハニワを作った古代日本人の性格は非攻撃的で温和であったのではないかと。

本来は土地の授受を仲立ちとする主従関係である「封建制度」も、ヨーロッパのそれが君主と騎士間の「契約」であったのに反し、日本ではそれは、ただ一人の主君に生命を捨ててまで「尽くす」ことを家来に要求する主従関係に変貌してしまっており、これが形は変えながらも現代日本の社会に引き継がれていること等々、興味深い講演であった。

懇親会は、山崎城東医師会長の司会の下、御出席の香月放送大学長、井出千葉大学長のユーモアを混えたお話を伺い、50名を越す出席者の和気あいあいの歓談の内に閉会となった。次回の総会開催地は、東京の予定である。

第85号は昨年度の学内外の記事をまとめて近々発行の予定です。

各地ゐのはな会だより

医薬合同横須賀 ゐのはな会

昨年に引き続き、昭和60年5月18日横須賀市内のホテルで開催された。

同会には神奈川県支部より会長代理として富田 裕先生(昭30年卒)をお迎えし、医学部12名、薬学部7名の参加があり盛会であった。前会長、原 武先生(昭5年卒)が逝去され(昭60年10月27日)たあと、久富良次先生(昭12年卒)に会長をお願いしている。

一昨年、鴻 忠義先生(昭13年卒)の叙勲に続き、今春、大倉正

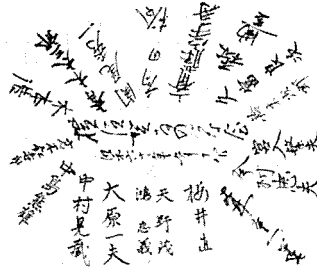
春秋会 (昭和31年卒、 開業医グループ)

我々、昭和三十二年卒のクラスはクラス会とは別に開業している者だけの集まりを、年二回もつようになつてからこれ二十年になる。その時々話題は時の流れに伴う我々自身の生活内容の変化によつて変わってきた。変わらないうちの短くはあったが四年間の千葉大学医学部時代の個々のもつていた仕種である。それが我々を結びつけている大事ななきずなのように思われる。だから、何時会つてもすぐ打ち解けられる。

今回の春秋会は同級の遠藤光夫

二郎(昭14年卒)、中村晃蔵(昭9年、薬卒)両先生が叙勲の榮に浴された。

懇親会は近況報告のあと、懐旧談に花が咲き、和氣あいあいのう



氏が東京女子医大から東京医歯大の第一外科の教授になられたので、そのお祝いを兼ねて東京新宿で行われた。

本会のメンバー31名中、出席し

たのはマネジャーの小野君をはじめ、大島、上野、森、碧、滝沢、関、大塚、神尾、宮川、松丸、猪狩、志村、西原の諸君と幹事の山口、それに遠路、静岡から辻君、佐賀から古川君であった。遠藤孝兄は私立から国立医大に行かれたので特に感じられたのか、臨床では患者あつての医学であることを強調していた。また、東京では年間約四百人が食道癌で亡くなるので、この死亡数をへらす方向に努力したいと話された。我々開業医

ちに歓談された。

青木太三郎(昭28年卒)記。

昭和60年度神奈川県 ゐのはな同窓会支部 総会報告

去る六月二十一日、横浜市内で開催された総会で、昨年度活動報告、決算報告の後、本年度は会則の一部改正を行うため会員の協力をお願いした。昨年に物故された川島広吉先生(大9卒)以下五名の方方に対し黙祷をさされた。

特別講演には、国立横浜東病院院長の上野高次会員(昭23卒)が「国立東病院における肝、すい臓疾患の診断と治療について」と題して彼の貴重な研究の一部をスライドを使って話され、出席した40名一同興味深く拝聴した。

また、二月には同支部会の第二

にとつて誠に心強い話であった。ややもすれば情性に走り勝ちである我々に良い意味のライツを与えてもらい有意義な会であった。山口慶三(昭31年卒)記。



回園幕大会が開催され、九名の参加者が腕を競った。成績は次の通り。一位、島田孝幸(昭23卒)、三月一日逝去)、伊藤隆康(昭17卒)、二位、勝田三郎(昭24卒)、大塚武啓(昭24卒)、三位、平沢 康(昭35卒)、石井克己(昭24卒)、四位、田中 洋(昭15卒)、芝田鉄郎(昭23卒)。

末永直光(昭20年卒)記。

昭八会クラス会

昭和八年入学、昭和十二年卒業のクラスは、今年卒業四十八年目のクラス会を、去る五月十二日に東京一ツ橋の日本教育会館九階「喜山」で開催した。

昨年二月に高山茂樹兄が他界され、十一月には昭和五十七年以來クラスの庶務会計幹事として熱心にお世話下さった稲生芳文兄が惜しくも長逝されたので、会のはじめに本年度幹事の河村謙二君から追悼の言葉が述べられ、両兄を併せて物故会員三十七名の御冥福を祈つて一同黙祷を捧げた。

本年の会は稲生夫人をはじめ夫人方六名の出席を得て総勢二十一名の賑やかな会となった。札幌の水野秀一兄が遠路をいとおず夫人同伴で出席されたのは感激であつた。お互いに七十才を過ぎても、会えば忽ち亥舞台での青春時代を語り合う、楽しいひとときを過ぎた。明年度の幹事は、小泉 寿兄にきまり、明後年(昭和六二年)の卒業五十周年の記念行事について皆で意見を述べ合った。

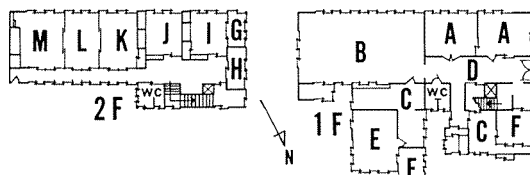
(庶務会計幹事、久富良次記)

同窓会館改修成る

昭和26年に建造されて以来、皆に親しまれてきた同窓会館も年々老朽化が進み、二階に多人数が集まるのは危険とまで言われるよう

になつていた。同窓会館新築のめどが全く立っていない現段階の改善の策として、改修工事(総工費一、三八五万円)を行うことになり本年三月十五日完了した。間取りは今までと変わりは無いが、一階の学生、職員食堂は立食パーティのできる集会室となった。同窓会館の利用を御希望される会員は、医学部庶務係、海宝まで御連絡下さい。(電話〇四七二二二二七七一内線二〇〇七番)

同窓会館間取り図



矢印は正面玄関

- | | |
|--------------|----------|
| 2 階 | 1 階 |
| G: 緑 側 | A: 事務室 |
| H: 喫煙室 | B: 集会室 |
| I: 鶴の間 (10帖) | C: 厨房 |
| J: 亀の間 (10帖) | D: 玄関ホール |
| K: 梅の間 (12帖) | E: 倉庫 |
| L: 竹の間 (12帖) | F: 管理人室 |
| M: 虎の間 (15帖) | |

新名簿予約 申し込みご案内

発行予定 昭和60年11月下旬
予約価格 三千元(送料を含む)
規格 B5版 約四二〇頁
予約方法 昭和60年10月末日
先にお送りした振替用紙をご利用下さい。三千円の振り込みをもつて予約受付けといたします。なお、その他の送金方法でも結構ですが、その際は「名簿予約金」と明記して下さい。お問い合わせは医学部内ゐのはな同窓会事務局(内線二〇八三)にお願い致します。



倫理委員会発足する

体外受精、臓器移植等への倫理的配慮

医の倫理の確立、患者の人權の尊重をうたって、一九六四年に世界医師会が採択したヘルシンキ宣言(一九七五年、東京総会で修正)は、臓器移植やそれに伴う脳死の判定の問題、さらに体外受精の発展的傾向等の背景としていよいよ重要なものとなりつつある。吉田医学部長は、昨年来この種の問題に対処するため倫理委員会の設置を考慮していたが、昭和六〇年二月四日の総務委員会において討議し、総務委員会内のワーキンググループとして「医の倫理に関する検討委員会」を発足、二月十二日の教授会に報告され、奥井教授を中心に準備作業を開始した。この検討委員会は、全国数大医学部のこの種規程を調査検討し、基本となる倫理委員会規程等の素案をA、Bの二案にまとめ、四月八日の総務委員会の議を経て四月二十二日の教授会に報告した。しかし、A案は基礎となる「医学部委員会規程」第4条にのつとる委員会とするには「諮問機関」としての原則から外れており、B案として提示されたものでは医学部長、附属病院長の関与が全く無い委員会構成となっていて医の倫理問題を取り扱うに際して責任の所在が不鮮明である等、幾つかの点に問題が残る、さらに総務委員会としての審議、検討が継続されることとなった。

総務委員会では、「申請者」(申請→医学部長→(病院長、委員長に連絡のうえ諮問)→倫理委員会) (審査・答申)→医学部長→(病院長、委員長と協議)→教授会審議→医学部長より申請者に決

定を通知」の基本線を明確にし、村山教授及び鈴木庶務係長の緊密な連絡作業を中心として検討を急いだ。五月二〇日付けで医学部長名で各委員に素案を送付、意見を求め、六月三日の総務委員会にて最終案を議し、六月一日の教授会にて「千葉大学医学部倫理委員会規程」(同・審査等実施細則)を決定し、即日施行した。この日の教授会にて規程の審議に当たって

村山教授は、①千葉大学医学部委員会規程を基本とする特別委員会である。②数段階の審査過程を含む慎重な規程である。③千葉大学医学部(教授会)が全責任を負う形式を明確にし、社会的批判に 대응する。④委員会の審査は出席委員全員の合意により決定される。⑤その他、細部にわたり、他大学に類似を求められない独自の規程である。等々の特徴を解説した。ち

なみに、委員会構成は「基礎医学系教授(三名)、臨床医学系教授(三名)、千葉大学内の医学分野以外の教授(二名)」である。なお、これ等の委員には次の各教授が選出された。

(基礎医学系教授) 村山 智、木村 康、萩原彌四郎(臨床医学系教授) 岡本昭二、中島博徳、佐藤 孝三(医学分野以外の教授(法経学部) 江守五夫、地主重美。

七月三日、第一回委員会が開催され、委員長に佐藤孝三教授、副委員長に萩原教授を決定し活動を開始した。第二回委員会は九月四日に開かれ村山教授より「脳死について」の解説があり積極的討議が行われた。なお、第三回委員会「臓器移植について」(十月二日、第四回委員会「体外受精について」(十一月)の順に討議が進められる。

御承知の如く、千葉大学とゲッティンゲン大学の姉妹提携は、一九八二年五月十三日、香月学長(当時)とカムプ学長の同席署名により成立した。以来三年間の交流について報告する。

八二年、交流に先立ち、当大学婦人科グロスビッチ講師が三カ月間、高見沢教授の下に留學され、その間に同科のクレーン教授は二回目の千葉訪問を果たした。八二年秋、当大学に留學していた耳鼻科内藤講師(当時)が帰国。

同年八、九月には、前看護学部長、石黒教授夫妻が滞月(永井先生はゲッティンゲンを月沈原と書かれた。この間に、ブンガロトキンで世界的に有名な、李鎮源教授(台湾大学)が来月。(ブンガロトキン上先生が、千葉は日本のゲッティンゲンだと言ったことがありましたが……)という御手紙を下された桑田先生は、文学青年としての先生あがれのトーマスマンの生地、リユーベックを

訪ねられた後に当地において下さった。ブランク通り(マクス・プランクは四七年当地で没)の静かな宿の近くにある、細菌学者トムセン教授宅に先生と私達夫妻は夕食に招かれた。この家は、大数学者ヒルベルトが建て、四二年に没するまで住んでいた家で、ミンコウスキー、デバ、ボーア、ポレン、ハイゼンベルク等々の俊才が集まり、デイスカッションしたのもこの家である。

ロキウムは今も研究所の語り草になっている。この様に、この三年間は多くの先生方をお迎えして楽しい思い出をさせていただいている。しかし、両大学姉妹提携は、元来、医学部をもとにしたものであるが、肝心の医学部から若い人の留學の少ないのは寂しいかぎりである。(筑波大学の牧教授のお弟子さんが目下留學中ではあるが)私はこの間、二度、学術振興会外国人招へい研究者および客員教授として大阪大学に招かれたが、千葉へは挨拶のために立ち寄る程度で、学生諸君との接触がなかったのは残念である。八三年には昭和33年卒の二十五周年クラス会に出席でき、六十余名の同級生に会えたことは、遠く千葉を離れてしまった私にとっては、この上なく嬉しいことであった。

姉妹提携三年ゲッティンゲン大学から

高野 光 司

た。

八三年四月から五月にかけて退官直後の桑田先生が、三つのインターフェロン関係の国際会議の間に、ゲッティンゲンに一周間滞在され、微生物学教室ゼミナールでお話しになった。

「昔、永井 潜先生や解剖の井上先生が、千葉は日本のゲッティンゲンだと言ったことがありましたが……」という御手紙を下された桑田先生は、文学青年としての先生あがれのトーマスマンの生地、リユーベックを

た。昔話研究を志すところであって同じ道を歩む家内(高野享子)をしばしば訪れる。一方、当大学からの第一号はフーレンホルツ経済学士。彼の日本語は国際交流基金日本語試験で、ドイツ語圏内で抜群の一番であった。経済学研究のかわら、当地でわずか三年半、家内の指導の下で勉強した成果である。

八月、萩原教授が、昭52年卒の小林君をともし訪月。再会を約束すも二度月明の句を残された。今回は夏休みと週末のため講演されなかったが、七三年のドイツ語による先生の口

提携第二号交換生は、音楽専攻

の句を残された。今回は夏休みと週末のため講演されなかったが、七三年のドイツ語による先生の口

の句を残された。今回は夏休みと週末のため講演されなかったが、七三年のドイツ語による先生の口

(復活祭休みに)ゲッティンゲン大学医学部、病態神経生理部門教授、昭33年卒。

新制の日本学術会議第七部長に就任して

本 間 三 郎

昭和二十三年に日本学術会議法が制定され、戦争によって荒廃したわが国学術の復興が図られました。学術会議はそれを受けて、学術振興のため、政府に数多くの勧告をし、また国内外の学術研究の連絡を密にする等々、多くの成果を挙げてまいりました。わが国の今日の学術の発展に大きく寄与しております。ゐのはな同窓会より



小池敬事、中山恒明、三輪清三、北村武の諸先生が会員となられ、これまでの活動に参画されました。このように長い歴史を有する学術会議も、十年ほど前から、これまでの復興のための諸事は終ったとし、急速に展開してきている学術に対応するため、その体制を改善する必要が指摘されるに至りました。学術会議法の改革が企画されました。しかし自らの椅子をもち上げることが難しく、改革のなされないまま今日に至り、逆に政府の手に法改正をゆだねる結果となりました。改革のなかでの最も大きな変革は会員の選出方法で、従来のような有権者による選挙でなくりました。学会から候補者

がだされ、推薦人会の協議でそのなかから会員が選出されます。第七部長は三十三名と従来より三名増えられました。会長、副会長、部長、副部長、幹事により運営審議会が構成され、常置、特別委員会および研究連絡委員会により活動して行く体制は従来の通りです。新しい制度のもとで会員として、その抱負を述べよとのことですが、私自身第七部長に選出されたので、その抱負を述べること、その責任の重大さを痛感しております。少なくともこれからの学術会議は将来の学術を展望し、その対応を考えることであると思っております。元号法案とか、教科書検定における侵略云々など、政府が対策を立てているときにこれを批判することではなく、その事態を予見してその対応を政府にあらわに提言すべきであるうと思っております。科学発展への模倣をいさぎよくせず、われわれの頭脳展開の独創的基盤作りを旨とし、国際対応に意をつくすこと、先行する科学技術に対して諸科学の調和ある発展を心掛けることではなからうかと考えております。具体的には私共に直接関連して、医の倫理問題、高齢化社会への対応も学術会議での課題として取りあげて行きたいと考えております。(昭21年卒、生理学第一講座教授)



戦前には日本の学会の中核機関として帝国学士院、自然科学系の国際連絡のために学術研究会議、研究の振興とその応用のために日本学術振興会があった。これら学術三団体は戦後の民主化の動きと改革の波によってそれぞれ新体制に改組され、上記学術研究会議は廃止され、代りに日本学術会議が誕生した。

日本学術会議



このたび、思いがけず学術会議会員に推薦され、七月二十二日に任命された。第七部(医学部門)は部長が本学の先輩である本間教授で、副部長が薬学部の北川教授であって、千葉出身者としては心強いからである。第十三期の活動方針は、まだ学術会議全体としては決っていないが、第七部における討議内容から見て、次の三点が

日本学術会議会員に任命されて

新 井 正

学術会議はわが国科学者の内外に対する代表機関であるが、アカデミーの構成方法としては世界にも類例のない選挙制度により会員を選出する制度をとり、以後37年間機能を果たしてきた。種々な経緯を経て今回大改革が行われ、特定

真菌学会、防菌防黴学会、食品衛生学会、放線菌研究会(現在は学会)よりの推薦により会員に任命されたが、微生物学が農業総合科学に属するため第6部の会員となつた。

来生物活性研究所に到る迄永い道のりを微生物一筋で過ごしてきた。したがって今日微生物学関連学会の推薦により新制度の下で学術会議会員に任命されたことは研究者冥利につきる事と受けとめては

重要事項に上げられると思われる。(1) 生命倫理(医の倫理を含む)特別(または常置)委員会の設置、(2) 学術国際交流の推進、(3) 基礎的研究の充実促進。その他に、筆者としてぜひ実現をはかりたいものは「国立医学博物館の設立」である。本間、北川両先生も後押しして下さっている。この博物館設立を勧告にまでもって行きたいと願っている。国立医学博物館は、解剖学を中心に、病理学、社会医学、医史学の領域

を備え、説明は和・英語で文書、録音テープ、ビデオテープ等に納められてあり、いつでも直ちに希望する標本や模型が見られて、その説明が聞けるように管理する。これらの標本はもちろん博物館の職員が製作するものが主である

日本学術会議会員に就任して

黒 住 一 昌

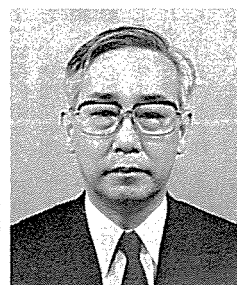
が、さらに各大学であまり活用されてない古い標本や器具、図書等があれば寄贈してもらって、展示あるいは保管して有効に利用する。博物館は所蔵資料の一部を常時陳列して、一般の来館者に見せると同時に、全国の大学その他の研究者には自由に利用させ、それぞれの領域の研究資料として活用できるようにし、また職員はいくつかの部門に分れて、先端医学の研究に従事する研究博物館としたいと思う。

卒、群馬大学内分秘研究所教授)

教授就任挨拶

麻酔学講座
水口公信

(昭和28年卒)

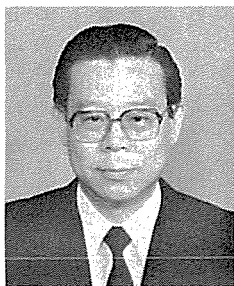


8月1日付をもって千葉大学医学部麻酔学講座を担当することになりました。昭和40年千葉大学に於いて麻酔学講座を開設された米澤名誉教授の業績を継承することが出来ることは大変光栄であります。そもそも我が国の麻酔学は第二次世界大戦後の朝鮮動乱に一致して吸入麻酔法を中心に広く普及し、昭和35年に他の学会に先がけて麻酔専門医制度を発足させております。当初は麻酔を専門に従事していた人達でも、将来麻酔が一つの独立した専門職として成り立つか疑問視する向きもありました。医学の進歩に伴い、医療の細分化、専門化が進むにつれて、ペインクリニック、集中治療、救急医療に挑戦を試みながら、麻酔管理を行う麻酔専門医は増加しております。これは手術室の麻酔需要に応えるばかりでなく、蘇生・痛みや呼吸の難治性疾患に取り組み研修の場が大いに活用されるためであり、また、つまり学問的な背景や臨床的活動の場が広がり、呼吸・循環・代謝に関する基礎をもった基礎医

学と臨床医学とが直接交流出来る麻酔科学に若い医師や医学者が興味と理解を示すようになり、さらに医師の過剰が麻酔専門医の増加に拍車をかけたとも考えてよいでありましょう。このような新しい教育システムの改革は従来の縦割りから横割り方式に進んでいる今日の臓器別治療体系の大きな流れを反映するものであります。私は医療を総合的に捉える麻酔科医が手術室でバックのみを握る考えを捨て、他科の医師と一緒に、悩

看護学部長に就任して

看護学部機能・代謝学講座教授
石川稔生



昭和六十年四月より看護学部長に就任致しました。

医学部では小林龍男先生の下で薬理学を専攻し、現主任教授村山智先生の助教授をつとめ、昭和四十九年千葉大学看護学部創設準備室の教授となり、松本祥準備室長(現名誉教授)とともに看護学部の設立に参画し翌昭和五十年四月看

んでいる患者を救う医師の育成に努めていきたい。現今、救急の現場の輸血拒否・臓器移植・脳死・ターミナルケアなど生と死の根本問題は山積し、この問題にも無関心ではいられません。新しい人間医療のあり方を、医学教育の中にとり入れ、科学技術の進歩のみに先行してはいないか、哲学・宗教・心理学の分野が無視されているか、もう一度考えてみたい。本来の大学の使命を踏まえながら、教職員が一体となり、和を尊び、研究・教育・診療に、また教室の運営を円滑に運ぶように努力していきたいと思ひます。

今後とも会員の皆様の御指導と御鞭達をお願いいたします。

人事移動

(昭和60年4月1日)
(昭和60年8月31日)

昇任

教授 水口公信(麻酔科学、昭28卒、磯野可一(外科学第二、昭33卒)。

助教授 服部孝道(神経内科学、昭42卒)。

講師 秋草文四郎(病理学第二、昭50卒、鈴木晴彦(耳鼻咽喉科学、昭48卒)。

辞任

講師 西野 卓(麻酔科、昭47卒、国立ガンセンター手術部室長、岩沢博司(産婦人科、昭47卒、桐生山口病院)。

訃報

山本十三氏(昭14卒、昭60年4月5日逝去)
堀 義光氏(昭23卒、昭60年4月6日逝去)
岸高 克己氏(昭4卒、昭60年4月14日逝去)
大森 喜久氏(昭5卒、昭60年4月15日逝去)
牧野 五郎氏(昭17卒、昭60年4月26日逝去)
佐藤英一郎氏(昭9卒、昭60年5月4日逝去)
尾崎 義夫氏(昭25卒、昭60年7月18日逝去)
大津 肇氏(昭22卒、昭60年6月逝去)
原田 美実氏(昭2卒、昭60年8月27日逝去)
伊藤 斎氏(昭25卒、昭60年8月30日逝去)

医学部百周年記念誌補遺

「百周年記念誌」に続く、その後(昭和51年以降)の本学の歩みを記録する「補遺」の出版計画が進められており、今秋中にも原稿執筆依頼が予定されている。

昭和60年春の叙勲

田那村 保先生 (昭和16年3月卒) 勲五等瑞宝章
新藤 清司先生 (昭和16年3月卒) 勲五等双光旭日章
池田 博先生 (昭和18年専卒) 藍綬褒章

編集後記

○本号より編集委員長を引き受けることになりました。玄鼻キャンパスに学んだ同窓生同志の心の交流の場として本紙の果たすべき役割の重要性を考えると、責任の重さを痛感せざるを得ません。まずは年四回の定期発行を軌道に乗せることを目標に努力する所存です。皆様の御満足のいく紙面とは程遠いとは思いますが、宜しく御支援と御助言等賜りますようお願い致します。

○喜ばしいニュースとして、松井宣夫氏(整形外科助教授、昭38年卒)が、先般、名古屋市長整形外科教授に内定し、近く発令、赴任の予定です。また、川村光毅氏(岩手医大第一解剖学教授、昭36年卒)には、岡山大学第三解剖学教授に決定し、近く赴任されることになっております。学内では、磯野可一講師が第二外科学教授に昇任いたしました。次号に先生方の抱負のほどをお聞かせ頂く予定であります。

○クラス会、各地るのはな同窓会便りをお待ちしています。編集の都合上、15字20行縦書き原稿用紙で二枚半程度にまとめて下さい。フープロ原稿も歓迎しますが、15字50行縦書きをお願いいたします。(徳永 叙)

「千葉大学新聞」「いはな新聞」等はのはな同窓会とは無関係です。また、学生自治会による「のはな祭」の行事一切についても本同窓会は直接の関係がありません。(編集部)